

平成 23 年 9 月 1 日

秋が近づき、食べものおいしい季節になりました。

食べ物、飲み物の味は舌で感じますが、体調の変化などが原因で、味を感じなくなったり、味がいつもと違って感じられることがあります。味の感じ方が変わると食欲の低下にもつながることになり、ひいては健康が悪化する可能性もあります。味覚障害の原因の一つとして薬の副作用が考えられています。

そこで今回は「薬による味覚障害（薬剤性味覚障害）」についてお話しします。



● 味覚障害と原因について

味覚障害の症状はさまざま、部分的には舌の一部や片側が、また舌全体が味覚を感じないことがあります。味覚障害の程度も、濃い味でないと感じないもの（味覚減退）や、全く味を感じないもの（味覚消失）があります。さらに、本来の味を異なった味に感じることもあります。味覚障害の原因には以下のようなものが考えられています。

- ・ 薬の副作用
- ・ 糖尿病、肝障害や腎障害などの全身疾患
- ・ カゼ
- ・ 口腔疾患
- ・ 放射線治療の副作用

この中で、薬の副作用による薬剤性味覚障害には下の表にかかっているような薬が関係していると言われていています。これらの薬の、神経の反応を鈍くする作用や亜鉛の吸収を抑える作用、だ液分泌を抑える作用などが関わっています。

【味覚障害が報告されている薬剤の例（商品名）】

降圧薬	ラシックス、アムロジン、レニベース、プロプレス、ディオバンなど
消化性潰瘍治療薬	ムコスタ、ガスター、パリエット、オメプラール、タケプロンなど
抗うつ薬	トリプタノール、トフラニール、ルボックス、トレドミンなど
抗菌薬	クラリス、ミノマイシン、ジスロマック、サワシリンなど
解熱・鎮痛剤	ボルタレン、モービック、セレコックス、クリノリル、ハイペンなど
糖尿病薬	グルコバイ、ベイスン、アクトス、スターシス、メトグルコなど
抗がん薬	エンドキサン、エルプラット、ティーエスワン、ゼローダなど

*これらの薬を服用しているからといって必ず起こる訳ではありません。

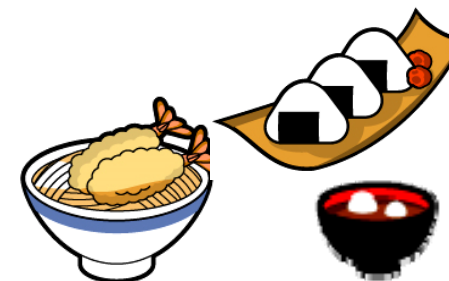
また、これら以外の薬でも起こることがあります。

● 薬剤性味覚障害の早期発見のポイント

薬剤性味覚障害は、症状があらわれた場合にはなるべく早く治療を行った方が症状が改善しやすいと言われていています。多くの場合は薬を服用してから2～6週間で症状が現れます。しかし、強い苦味を持つ薬などを服用している場合、薬の苦味が味覚障害の初期症状を隠してしまい、発見が遅れることがあります。

以下のような症状が現れたときは医師や薬剤師にご相談ください。

- ① 味が感じにくい。
- ② 食事が美味しくない。
- ③ 食べ物の好みが変わった。
- ④ 金属味や渋味など、嫌な味がする。
- ⑤ 味のしないところがある。
- ⑥ 口が渇く。



● 治療方法について

味覚障害があらわれた場合には以下のような治療を行います。

- ① 原因薬剤の中止・減量をおこなう。
- ② 亜鉛剤の補給をする。
- ③ 口腔乾燥の治療・唾液流出の促進、口腔の湿潤を保ち、唾液分泌を促進する。
- ④ 口腔内清掃とケアをおこなう。

これらの治療法の中で、味覚障害の状態に合わせた治療を行います。必要に応じて、ビタミン剤や漢方薬を使用することがあります。

*亜鉛は舌の味覚細胞が新しく作られるために必要と考えられているため、亜鉛の補給が味覚異常に有効と言われています。

治療の基本は、味覚障害の原因となっている薬剤を特定し、早期に中止することです。しかし、原因薬剤が治療上必要な薬である場合には、薬を飲み続けたまま味覚症状を改善する治療を行うこともありますので、ご自分で判断をせずに、医師・薬剤師にご相談ください。



〈参考〉 重篤副作用疾患別対応マニュアル 薬物性味覚障害 厚生労働省調剤と情報 2008/Vol. 14

「Q&A で学ぶ栄養療法と薬学管理」 (薬局 2008 vol. 59 7月臨時増刊号)

